

もうすぐ節分です。

節分といえば、「鬼」と「豆」が思い浮かぶでしょう。鬼と言うと、最近アニメや漫画で有名なあの作品を連想する人もいるかもしれません。

そもそも「鬼」とはいったい何者なのでしょう？

鬼の正体については諸説ありますが、ある説では病魔(に侵された人)だったと言われていています。熱が出て真っ赤な顔をしたり、具合が悪くて青ざめた顔になったり、身体の一部が腫れるなど変形してしまったり、普通では考えられないような行動や言動を取ったり・・・、確かに鬼に見えなくもありません。

さて今回は、節分や鬼にちなんだ昔話を紹介したいと思います。

～くぬぎの精と煎り豆～

昔々、殿さまの使いで他の国へ行く途中の男が、ある峠のふもとでひと休みしていると、突然鬼が現れ、男に襲いかかってきました。男は怖くて腰が抜けてしまい、逃げることも出来ません。それでも男は、勇気を振り絞って「食われる覚悟はできた！でも、この世の最後に頼みを聞いてくれないか」と鬼にお願いをしました。

すると鬼は襲うのをやめて「何でも言ってみろ」と言いました。男は「鬼というものは、自分の大きさを自由に変えられると聞く。食べられる前に、もっと大きくなれるところを見せてくれ」と頼みます。すると鬼はそんなことは簡単という顔をして、大きく息を吸ったと思うと山よりも大きな体になりました。男は「さすがは鬼だ・・・でも、さすがの鬼でも小さくなるのは無理だろう」と言うと、鬼は得意げな顔で大きく息を吐いて、これでもかとどんどん小さくなりました。ついには豆粒ほども小さくなった鬼は「これで満足か？」と聞いてきます。男は「ああ、満足だ！」と豆粒の鬼をつまんで口に持っていきパクッと飲み込んでやりました。男はまんまと鬼退治ができた喜びました。

しかし、めでたしめでたしとはいきません。男は急な腹痛に襲われます。飲み込んだ鬼がお腹の中で暴れ出したのでした。男は血相を変えて近くにあったお寺に駆け込み、和尚さんに事情を説明して助けを求めました。すると和尚さんは煎った豆を用意して、「鬼は外！」

と叫びながら、豆を男に食べさせるのです。すると男のお腹が、どんどんどんふくらんできて、“ブーーーーッ！”と、大きなおならが出て、そのおならと一緒に豆粒の鬼も飛び出し、ようやく男の腹の痛みは治まりました。鬼はというと、あまりのおならの臭さにそのまま消えてしまいました。

和尚さんが言うには、鬼は寺の境内に生えているくぬぎの木の精が化けたものだろうとのこと。それ以来その寺では豆まきが恒例行事になり、無病息災を祈りに来る人が後を絶たなかったそうです。

この昔話が教えてくれるのは、苦しい局面を乗り切るためのユーモアです。鬼が小さくなるよう話をしていく機転、オナラで鬼をやっつけてしまう意外さ、危機を回避する方法は多様です。

大学生活の中でも様々な苦しい局面があるでしょう。真正面から真面目に取り組むことも大切ですが、時にはユーモアに富んだ発想や方法を試してみることも良いかもしれません。なかなか1人ではユーモアなことが思い浮かばないという時は、ぜひ総合相談室にいらしてください。2人で考えることで、良いアイデアが見つかることもあります。

いつも2月3日に行われる節分は、今年124年ぶりに2月2日に行われるそうです。そんなちょっと特別な節分で、苦しいことやCOVID-19などの病魔がどこかに飛んでなくなるよう、豆を撒いてみてはどうでしょう？
気持ちが少しスッキリするなど、ちょっとだけ何かが変わるかもしれません。

専任カウンセラー 後藤龍太